

日本教育学会 若手育成委員会報告

—2023年8月から2024年8月までの記録—

1. はじめに

2023年8月に、委員長を含む新規委員6名が交代・着任となり、若手委員会の活動をおこなった。以下、1年間の活動を報告する。

2. リレー企画第一弾「なりたい研究者像を描こう—研究者のワーク&ライフ・バランスを考えてみよう!—」の報告

本企画は、2024年6月23日（日）14時から16時半までオンライン・ウェビナー形式で開催された。事前に89名から申し込みがあり、当日は主催者10名を含む70人が参加した。登壇者3名による各自25分の個別報告の後、事前および当日寄せられた質問を登壇者に答えていただく形で交流を図った。以下、簡単に企画の趣旨、登壇者の報告概要、総括と質疑応答、本企画の成果と課題について報告する。

（1）企画の趣旨

「人生は選択の連続である」といわれるように、自発的であれ偶発的であれ、私たちは自分の人生を大きく転換する／方向づける画期となる出来事を経験しながら生きている。どのような道を歩むかは、プライベートな問題に関わる無数の出来事と、さまざまにある研究者としての在り方との無限ともいえる組合せの結果であり、あらゆる人に共通する出来事は存在しない。そこで、事前のアンケートをもとに比較的多くの人々が関心を寄せていたライフ・イベントの中から、留学生としての経験、結婚およびパートナーとの生活、子育てに焦点を当てるかたちで、3名の若手・中堅研究者にお話を伺うことにした。それぞれの方の経験が代表的なものではなく、個別のケースであることを踏まえつつ、研究者キャリアにおける「ターニング・ポイント」や「決断」の一端を共有し、なりたい研究者像を描く際のヒントを提供したいとの願いから企画を実施した。

（三時眞貴子（広島大学））

（2）登壇者の報告概要

① 第一報告者 班婷（愛媛大学教育学部 准教授）

報告者は、日本への留学、日本での就職を経験した外国人研究者という立場から報告をさせていただいた。当日の主な報告内容は以下の通りである。

中国で大学生生活を送っている時に専門知識を教えることの魅力に気づき、大学教員を目指すことにした。大学教員になるには学位が必要と知り、当初は研究者ではなく大学教員を目指して日本の大学院に進学した。博士課程後期に進学する頃には研究テーマが決まり、研究の面白さが分かりはじめ、研究や研究者のイメージが徐々についていった。

留学、大学院進学、就職、転職…。それぞれのライフ・イベントで直面した最大の困難は、言語の壁であった。日本語が自由に使えないことは、自信喪失にもつながる。そこでまずは日本語の上達のため努力した。言語の上達には地道な努力あるのみだが、今振り返ってみて、やって良かったと思うのは、「日本語教師養成プログラム」に参加したことである。報告者は博士課程前期の時にこのプログラムを履修したが、日本語教師を目指す立場として日本語を学ぶことで、表現の微妙な違いや、間違いやすい文法、その原因についてより明確に理解することができた。この経験は自分が日本語を使う際にも役立っている。日本の学校では、問題を解き終えた子どもに対して、周りの子どもに教えてあげるよう指導しているが、この方法は本当に効果的だと思う。

就職も大変だった。初職は任期付のポストだったため、2年目から就職活動をはじめたが、内定がひとつももらえなかった。周りの先生からは、挑戦し続けていれば、いつか評価してもらえる、いつか自分の長所を生かせる大学から採用してもらえるというアドバイスをいただいた。そのアドバイスを信じて、自分の専門分野に関連するほぼ全ての公募に挑戦した。

プライベートなことだが、日本で就職活動をす

るかも迷った。上記のような状況のなか、帰国して就職活動をする選択も考えた。日本の大学のほうが研究面からも自分に合っていること、パートナー（いまの夫）が日本での研究を希望していたため、日本に永住することを決断した。現在、報告者は愛媛県で、夫は兵庫県の大学で働いている。月に一回程度しか会っていない。一人暮らしのため自由に使える時間は十分にあるが、仕事のために私生活を犠牲にしているとも言えるかもしれない。大変な部分もあるが、それぞれの夢のためにという気持ちで、それぞれの職場で頑張っている最中である。

② 第二報告者 高野貴大（茨城大学教職大学院助教）

報告者は、日本学術振興会特別研究員、独立行政法人教職員支援機構研修特別研究員を経て、2021年4月から茨城大学に所属している。博士課程を修了して比較的年数が浅い立場から報告を行った。当日は、研究者人生の中でのライフ・イベントと、仕事と私生活のバランスについて、自身の経験談を報告した。

まずライフ・イベントとして、第一に、研究者という進路を決めた大学院生の頃のこと、第二に、家族が出来たこと、特に子どもが誕生したことの2つを挙げた。前者は、地元に戻ることとの葛藤状況をお話した。後者は、子どもがいることでの喜びと思いをお話した。また教育学研究者として子どもの発達を目の前で見ることの意義という点は、後の全体討論での話題にもなった。

次に、仕事と私生活のバランスについて、子どもの誕生後、仕事の優先順位、スケジュール管理を意識するようになったことを報告しつつ、「研究」を仕事と捉えるのかどうか率直な思いもお話した。「研究」「教育業務」「学内業務」「社会貢献」の4分類で「仕事」を捉えているが、現状、研究は仕事でもあり、私生活の一部でもあるという意識を持っている。しかし、私生活、特に家族との時間は無条件に喜びがあり、そのバランスは時間だけ見れば、確かに難しい。他方、専攻分野（学校経営学、教師教育研究）からして、「教育業務」「社会貢献」は、研究にも還元できることが多い。「教育業務」では、現職派遣院生に対して、学校経営の視点を感じてもらう授業やゼミをしている。「社会貢献」として、現職教員を対象とした研修講

師（行政研修、校長会主催研修、校内研修等）をやらせてもらう機会も多い。「業務」で得た関心や問題意識を、専門である米国研究に昇華させるという循環ができつつある。これは必ずしも正攻法と言えないのかもしれないし、今後、別の有り様を見つけるかもしれない。しかし、報告者なりに現状のワーク&ライフ・バランスを冷静に捉え直すことができたことは大変有意義であった。関係各位にあらためて御礼申し上げたい。

③ 第三報告者 乙須 翼（長崎国際大学人間社会学部 教授）

報告者は、地方私立大学に勤務する教育学研究者である。主たる研究領域は西洋教育史・子ども史であり、勤務校では教職科目の授業や教職課程運営のほか、学科や大学院の授業、全学の教務関係の業務なども担当し、既に15年ほどが経過している。これらのキャリアはさして珍しくなく、研究者としても輝かしい業績を残しているわけではない。そんな報告者が今回登壇することになったのは、おそらく、報告者が職場（長崎）と自宅（福岡）を遠距離通勤しながら2人の子ども（小6と小3）を育てているという事情による。報告者自身、過去に、ある国立大学の「女性研究者支援室」（文部科学省「女性研究者支援モデル育成」事業）で働いた経験があり、その際にはこの種のイベントを企画する側でもあったため、日本教育学会が企画するのであれば喜んで、と今回の話をお引き受けした。

報告では、ワーク&ライフ・バランスを保つ上でターニング・ポイントとなった出来事や、そこでの選択、また子育てと仕事の両立の実際など、報告者が経験した“個人的なこと”をお話した。そこには、例えば、【新婚早々の別居と多忙な業務の中で出産適齢期の女性研究者が感じた焦り】【任期無しの大学教員ポスト】と「生まれてくる子どもと夫との家族生活」を両立する唯一の道として選んだ遠距離通勤【コロナ禍の在宅勤務がくれた束の間の「普通の家族生活」で感じた幸せと謎の罪悪感】【ケアを他者に委ねて成立する教育学研究者のワーク&ライフ・バランスという矛盾】などが含まれる。

これらの話が本セッションの趣旨に沿っていたかどうかは疑わしいが、今回、報告内容を考える中で報告者自身気づかされたのは、既に言い古さ

れたことではあるが、“個人的なこと”の中にこそ政治的・社会的な課題や研究テーマは内在するということである。子育てや保育・教育などのケア領域、また子どもの存在さえもが忌避される現代社会において、教育学研究者は方法こそ違えども、子ども達のために何ができるのかを日々研究し、実践している。報告者もその一人でありたいと考えるが、その一方で、そういった現代社会だからこそ、我が子には、子育てに幸せを感じる母を見せたい、またそうありたいとも考えている。しかし、実際は、教育学研究者であるからこそ、両者の間で深く苦悩し、もがく自分がいる。報告者自身の“個人的なこと”の中にも多くの研究テーマが隠れている、そのことに気づかされたセッションであった。

(3) 質疑応答と総括

本企画における登壇者からの話題提供及び質疑応答パートの進行担当者は、自身もまた大学院生と大学教員のグラデーションを帯びる、まさしく本企画のメインターゲットであるといえる。以下では、そうした立場から報告の総括と質疑応答についての所感を述べる。

上記のように、登壇者3名から現在までのワーク&ライフ・キャリアについて報告があったが、特に「大学院在籍時点」、「就職活動時点」、「初職への就職時点」、「現在」といった各ステージでのターニング・ポイントを中心に話題提供をいただいた。ワーク・キャリアに対して家族の存在が大きく影響を与える点に関しては3名に共通していたが、影響を与える対象は「留学生としての立場」や「就職した大学・今後の就職先」のように様々であった。そうした点を含む、困難・迷い・選択に対峙する際に何を優先したのか、あるいは何を意識して取り組んだのかという詳細な話題提供は、多様なキャリアの存在を示すものであり、研究者にとってのライフ・キャリア形成のリアルな側面が共有されることとなった。

また、参加者からは多数の質問が寄せられたため、時間の都合上すべてに応答することはできなかったが、特に話題提供の時点では挙がらなかった事項についての質問を取り上げたことで、広くワーク&ライフ・バランスに関する議論を展開できたと思われる。その一つとして、登壇者のキャリアにおける「思い通りにはならなかったこと」

あるいは「諦める選択をしたこと」に関する質問があがった。参加者側においても研究者としてのキャリアを想定する上で、必ずしも希望通りにはならない現実との折り合いに対する意識が垣間見られた。

ワーク・キャリアのみならず、それを包含するライフ・キャリアを展望しながら自身のキャリア形成を図ることは研究者にとって重要な事項であり、それは多数の参加申し込みと質問が寄せられたことが証明している。その一方、参考となる情報を広く収集することは非常に難しい。それは当然、プライベートに関わるセンシティブな情報が含まれるためである。このようなパブリックな場における開催が容易ではないテーマについて、約2時間という決して長くはない時間ではあったが、若手・中堅研究者を中心に情報共有がなされたことには非常に大きな意味があったと当事者として確信している。そして、こうした高いハードルがある中でも、話題提供にご協力をいただいた3名の登壇者の方々に改めて感謝申し上げたい。

(藤田駿介 (流通経済大学))

(4) 本企画の成果と課題

仕事も私生活も、自分を取り巻く様々な条件や環境に左右される。そして、そこには自身の努力ではどうにもできないものも含まれているがゆえに、私たちは悩み、不安を感じることもあるが、日常においてそうした悩みや不安を同僚等と共有する機会はそれほど多くないと思われる。このような現状を反映するかのように本企画への参加者を対象とした事後アンケートでは、「研究と私生活の両立にみんな悩み、自分だけの悩みではないと安心できた」、「研究業績を積むことと同じくらい自分のライフプランも大事にしてよいのだと思った」といったコメントが書き込まれており、個々人の経験を共有することによって、アーリー・キャリアを中心とする参加者に安心感と前向きな気持ちを提供することができた。

以上の点を踏まえると、ワーク&ライフ・バランスをめぐる個々人の経験を共有する場（ワークショップやアーカイブなど）づくりに取り組むこともアーリー・キャリアの研究者の助けになると推察される。また、その際には教育学研究者＝大学教員といった枠に限定されない多様な研究者キャリアについても視野に入れる必要があるだろ

う。

(杉原 薫 (鹿児島大学))

3. リレー企画第二弾「自分がなりたい研究者像を描こう—early career から middle career への歩み—」の報告

本企画は、2024年8月31日(土)18時15分から19時45分までオンライン形式で開催された。事前に107名から申し込みがあり、当日は主催者9名、大会スタッフ8名を含む120名が参加した。登壇者三名による各自15分の個別報告の後、3つのルームにわかれ、参加者と登壇者の交流の時間を設けた。最後に、参加者同士で4名程度のグループに分かれて交流をした。以下、企画の趣旨、登壇者の報告概要と各ルームでの交流の様子を報告し、最後に本企画を総括する。

(1) 企画の趣旨

本企画は、研究者としてこれからキャリアを構築していくアーリー・キャリアの研究者たちが、ミドル・キャリアの研究者の経験に学びながら語り合うことを通して、自らの研究者像を描く時間を共有することを目的とした。

昨年度、若手育成委員会で行ったアンケート調査を踏まえ、アーリー・キャリアが抱える困難をブレイクスルーの契機として、1. 博論の執筆・出版、2. 就職、3. 国際的な共同研究の3つのキーワードを設定した。ミドル・キャリアの登壇者三名にはこれらの経験とともに、その中で何を大事にし、いかなる判断や選択をしてきたのかを共有していただいた。これらの経験を伺うことにより、アーリー・キャリアが自らの研究者としての生き方やビジョンを描き、模索するヒントを得ることが可能になると考えた。さらに、アーリー・キャリア同士が語り合う時間を設けることで、自分の将来のビジョンや、ネットワークを広げることの一助になることを願い企画を実施した。

(影山奈々美 (東京大学大学院 院生))

(2) 登壇者の報告概要

① 第一報告者 鈴木悠太 (東京工業大学リベラルアーツ研究教育院)

報告者のここまでの研究者としてのキャリアを振り返ると、報告者は、2023年2月に参加したノース・ダコタ・スタディ・グループ・オン・エ

ヴァリエーション (NDSG) のカリフォルニア北部での合宿研究会への参加が重要な契機となったことを意識するようになった。それは、2冊目の学術書の単著(『学校改革の理論—アメリカ教育学の追究—』(勁草書房))と3冊目の学術書の単著(*Reforming Lesson Study in Japan: Theories of Action for Schools as Learning Communities*) (Routledge) とを2022年の2月と3月に連続して出版したのちの私の研究者のアイデンティティの輪郭を明確にする機会となった。報告者は、NDSG に集うアメリカの「進歩主義教育 (progressive education)」の実践者、理論家、研究者、コミュニティ・オーガナイザー、学生、生徒たちとの濃密な時間を過ごすことで、私は日米の「進歩主義教育」を継ぐ者として、その理論と実践の歴史を研究する者であるというアイデンティティを獲得したのであった。

この経験は、続く2023年の秋のカリフォルニア大学バークレー校の客員研究員としての在外研究を導くものとなり、同校やスタンフォード大学での学術講演を行うなどのミドル・キャリアを決定づける機会を得ることになった。特筆すべきは、カリフォルニア大学バークレー校での私の講演には、同校の名誉教授であるジュディス・ウォーレン・リトル (Judith Warren Little) が指定討論者を務めて下さるに至ったことであり、その内容である。リトルは、私の単著が、アメリカで名高いレッスン・スタディ (授業研究) を「改革する」ことを主題化したことへの驚きから述べ、その意味を開示するものであった。中でも、リトルのアイデアの中心に、かつてスタンフォード大学のミルブリー・マクロフリン (Milbrey McLaughlin) が提起した「相互適応 (mutual adaptation)」の概念が存すること、そして、私が特徴づけた「学びの共同体」の学校改革が追求したレッスン・スタディの「改革」こそがレッスン・スタディの「相互適応」の過程に他ならないと指摘する時、私のアーリー・キャリアの中心である博士論文を書籍化した第一の単著『教師の「専門家共同体」の形成と展開—アメリカ学校改革研究の系譜—』(勁草書房) (2018年) が明らかにした学校改革研究の系譜の中心的なアイデアが正しかったことを明らかにすることになり、報告者のアーリー・キャリアからミドル・キャリアへの歩みを力強く支えることになった。

② 第二報告者 西野倫世（大阪産業大学 全学教育機構 准教授）

報告者は、神戸大学大学院博士課程（後期課程）1年次の2015年4月より日本学術振興会特別研究員、2018年4月より大阪産業大学専任講師という経歴を経て、2022年4月から現職についた。2022年3月に博士課程を修了し、2024年2月に博士論文を基盤とした学術図書を刊行したため、本報告では博論出版を中心に、以下の3つの観点からの研究の歩みを披瀝した。

まず、博論の執筆・出版について、報告者は日本学術振興会・研究成果公開促進費（学術図書）の助成を受けて刊行したため、その申請時に意識したことを2点報告した。第一に、博士論文の基盤となった論文（全国学会の査読論文2本・招待論文1本、地方学会の査読論文1本）を中心に、博論が有する学術的価値を明示した点、第二に、これまでの研究活動、とりわけ科研費（特別研究員奨励費、若手研究、基盤研究（B））の研究成果として博論を刊行することの社会的意義を明示した点である。

次に、就職については、アーリー・キャリア期に焦点を当てて報告を行った。キャリアのスタートとして、DC1の獲得や結婚・改姓を行った博士課程1年を出発点に位置づけ、博士課程在籍時に、研究面では全国学会への論文投稿やゼミ内での共同研究・渡米調査の経験、教育面ではD2から非常勤講師を担当し、就職までに5つの大学で講義を担当できたことが、後の研究・教育の糧になったと報告した。他方、就職するまではあくまで院生という立場のため、社会経済的に“不安定”な存在であり、焦りや不安を感じていたこと、とりわけ自身の状況を鑑みると、早期に就職することが研究を続ける上で不可欠であったため、D3から就職活動をスタートしたという体験談を語った。その上で、幸い本学の専任講師として採用されたものの、着任当初は慣れない業務に追われて研究活動が不十分であることに焦燥感を抱いていたことや、それを乗り越えられた契機として、共同研究や学会活動を通じた対話、博士論文の執筆を挙げた。

最後に、国際的な共同研究については経験が少なく、他の報告者と比べて話題提供できる立場がないと断った上で、現在25カ国が参加する校長のリーダーシップに関する国際比較研究プロジェクト

メンバーとして活動していることに触れた。その際、数少ない経験ではあるが、国際共同研究を通じて日本の研究水準の高さを実感したと述べ、本報告の結びとした。

③ 第三報告者 奥村好美（京都大学大学院教育学研究科 准教授）

報告者は、博士後期課程修了後、兵庫教育大学講師・准教授を経て、現在、京都大学に在籍している。当日は、悩みや模索を中心にこれまでの経験を報告した。

まず、博士論文の執筆・出版についてである。執筆にあたっては、院生時代に個々の論文執筆を必ずしも計画的に進められた訳ではなかったことから、それらを博士論文として一つのストーリーに構成し直すことに苦戦した。計画的に研究を進めることの重要性を実感したのと同時に、結果的にストーリーが描けたのは、根底にある問題意識や問いが一貫していたからではないかと感じている。その意味で、今、自分がどのような論点に取り組もうとしているのかを意識しておくことは、博士論文の執筆の際に大切であると考えている。出版に際しては、自信を持ってない場合もあると思うが、思い切って出してしまうことで広がる世界もあることを実感しており、アーリー・キャリアの方には、チャンスがあればぜひチャレンジしてみることをお勧めしたい。

次に、就職についてである。就職に関しては、院生時代にきちんと研究を進め、論文として形にしていくことが、何よりも就職につながると考えられる。私自身、院生時代はそれを信じて取り組んできた。最初の就職先は、教員養成大学・教職大学院であった。特に、教職大学院では、当初、アーリー・キャリアの研究者であった自分は、学校の先生方に授業等でお話することの難しさに直面した。しかしながら、学校の先生方のお声を身近に聞ける機会は貴重であり、次第にそれを研究や実践に活かせるようになっていったと感じている。奥村好美、西岡加名恵（編著）『『逆向き設計』実践ガイドブック』（日本標準、2020年）も学校の先生方のお声から着想を得て実現した本である。

最後に、国際的な共同研究についてである。報告者は、オランダの教育を研究しているが、必ずしも順風満帆だった訳ではなく、研究協力を得にくいケースも経験した。しかしながら、研究を進

める中で、国際学会で、オランダで教員養成に携わる先生と出会い共同研究を行えることになったり、オランダの学校評価研究者とのご縁で単著 *Educational Evaluation and Improvement in Japan: Linking Lesson Study, Curriculum Management and School Evaluation* (Springer, 2023) を出版する機会に恵まれたりしたこともある。改めて、多くの人に助けられてきたことで、研究を続けていくことができたことを実感している。

(3) 質疑応答

各オンラインルームにて、以下のような質疑応答が行われた。第一報告者の鈴木悠太会員のルームでは、主に、海外の出版社から学術書を公刊することについての質疑応答が続いた。特に、出版の現代的な状況、出版社へ提出するプロポーザルの内容、査読の方法、シリーズ企画といった諸論点について議論が行われた。

(鈴木悠太 (東京工業大学))

第二報告者の西野倫世会員のルームでは、大学院進学、出版、育児と研究の両立に関する質問がなされた。それに対して、人数規模に応じた研究環境の利点、出版社の選び方と交渉の仕方、ロールモデルとなる先輩の存在等をご回答いただいた。

(柏木智子 (立命館大学))

第三報告者の奥野好美会員のルームでは、主に研究を進める上でのより具体的な話に焦点化された。例えば、他者との出会い (コネクション作り) や他者との関わりについて、また、研究テーマをどのように深め、それを学会誌や紀要投稿へどう繋げるかについての質疑応答がされた。

(影山奈々美 (東京大学大学院 院生))

(4) 総括

若手育成委員会の企画と他のセッションの企画との大きな異なりは、参加者同士の交流の時間を設けている点にある。それは、他者の講話を契機にしなが、参加者一人一人が主役となり、さまざまな話題について話し合っていたことで、悩みを軽減したり研究の活力を得たりすることのできるネットワークを広げていっていただきたいと願っているものである。

交流の中では、「博士課程に進学しようか悩んでいるのですが、進学に際してみなさんは何か

きっかけがありましたか？」という進路をめぐる話、「研究室ではどのように研究発表したりアドバイスをしあったりしていますか？」という研究環境の話、「この課題を考えているのですが、何かいい参考資料ありますか？」という研究への具体的アドバイスを求める質問など多岐にわたる話となされている。そうした話の中では、質問に答える方も、自分自身の生の文脈をもって語ってくださる場合が多い。事後アンケートへの参加者の回答に、「講演した先生の葛藤が伺えて、参加した学生が悩みを話せる雰囲気づくりがあり、とても良かったです。研究室では1人だったり数名だったりする学生もあるので、多様なキャリアを聞けるこのような機会は本当にありがたいと思いました。」という意見があるのは、主催者の意図というよりも、そこで答えてくださる方々の思いによるところが大きい。

それゆえ、本会の交流では、参加者の方々が、さまざまな人と触れ合えることで、研究に対する考え方や進め方、人生をどう歩むのかにいたるまでの多様な視点を得られ、エンパワメントされるという状況にとどまらず、人々の生を紡ぎ出す対話と思索を重ねてらっしゃるのではないかと捉えられる場面を多く拝見してきた。本会が、あるいは日本教育学会が、early キャリアの方々の横にも斜めにも広がるネットワーク形成の、そして研究をみんなで支え合いながら発展させていけるコミュニティ形成の基盤となることを切に願っている。最後になったが、話題提供に加え、質疑応答およびブレイクアウトセッションでのファシリテーターにご協力くださった三名の登壇者の方々に改めて感謝申し上げます。

(柏木智子 (立命館大学))

4. おわりに

今期は、前期から継続の柏木・藤田委員に加え、新委員となった影山・佐久間・三時・杉原・鈴木の七名が、年齢や性別、専門領域の壁を越えて忌憚なく語り合い、議論することによって、何よりも私たち自身にとって手応えのある活動を行うことができた。学会の仕事が単なる重荷でなく、各委員にとっての財産になれば幸いである。

(佐久間亜紀 (慶應義塾大学))